対話コーパスを用いた言い淀みの語の統語論的考察

土屋菜穂子
青山学院大学大学院文学研究科 日本文学日本語専攻

１ はじめに

言い淀みに関する研究についていくつか例を挙げると、次のようなものがある。

・社会言語学的立場から、言葉の使用はさまざまな条件に影響を受けるという考えに基づいて研究するもの。話者の性質（対話が独話か、あるいは親しい人との話合い、そうでないか等）、及び発話者の年齢、性別などに、出現する言い淀みは異なるという観察結果を提出。（塚沼 1979、Nagura 1997 等）

・日本語教育上での必要性から研究するもの。言い淀みを、発話者の維持するためのコミュニケーション上のストラテジーのひとつとして捉える。（ザトラウスキー 1987、畠口 1998、李 1997 等）

・「談話標識」あるいは「心的作業標識」として研究するもの。言い淀みを、話し手の心的状態をモニターする機能をもつ心理的標識のひとつとして捉える。（定延・田畑 1995、田畑 1995、田畑・金水 1997 等）

このように、アプローチの方法はいくつかあり、また、内省による研究、実例のデータを使う研究など、その観察方法もさまざまであるが、これらの多くは、主に談話中における言い淀みの役割、機能に焦点を当てたものとなっている。

本研究では、先行研究において言い淀みの語であるとされているいくつかの語を取り上げ、対話コーパスの実例を観察することで、それらの語の性質の一端を統語論的に考察したい。結論では、発話中における言い淀みの語の出現位置の範囲を、感動詞の出現位置と関連させて記述する。

２ 対話コーパスを使った観察

先に紹介した先行研究の中で言い淀みとして挙げられている語を参考にして、本研究では、「ええ」「あのー」「そのー」「まあと」「やばり」「なんか」「ねー」「うーん」といった語を取り上げ、以下これらを言い淀みの語と呼ぶことにする。そしてこれらの語について、次に挙げる対話コーパスを資料として観察を行う。資料とした対話コーパスの詳細は表1に示す。

1 『ATR 対話データベース』Vol.2. エイ・テイ・アール自働翻訳電話研究所、1993
2 『研究用連続音声データベース』Vol.7. 日本音響学会連続音声データベース調査委員会 日本情報処理学会音声処理研究委員会、1993
3 『RWC 音声対話データベース』. 技術研究組合情報処理開発機構 RWC データベースワークショップ（音声グループ）、1996
4 『女性のことば・職場編』自然聴覚データ. 現代日本語研究会. ひつじ書房、1997
5 『模擬対話音声コーパス』Vol.1 4. 文部省科学研究費補助金重点領域研究「音声・言語・概念の統合的処理による対話的理解と生成に関する研究」代表者吉田正浩、1997
6 『インタビュー形式による日本語話音データベース』. 文部省科学研究費補助金重点領域研究「日本語話音データベースの構築と実験的分析」. 研究報告書上杉隆一、1998

対話コーパスの利用法については、基盤的にはテキストデータを使用する。ただし「ええ」「うーん」とは、テキストデータからは応答詞の「ええ」「うん」と区別がつきにくいので、これらについては対話コーパス 5・6 の音声データも用いて実際の音声を確認しながら観察を行う。

３ 接続詞「で」との共起

具体的には、言い淀みの語が、同一発話者の発話中において、接続詞「で」と隣り合って出現し

2音声データについては、著者自身が聞き取りに行った。その際、言い淀みの音声であると判断する基準としては、杉田 1997、田畑・金水 1997 を参照し、「ねー」はインターセッションが平坦であるものの、「うーん」は平坦もしくは緩やかに下降しているもの、とした。
表1: 対話コーパス詳細

<table>
<thead>
<tr>
<th>対話コーパス（略名）a</th>
<th>発話者数b</th>
<th>対話数c</th>
<th>対話の形式d</th>
<th>機械可読</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1（A）</td>
<td>不明</td>
<td>72</td>
<td>模擬対話</td>
<td>○</td>
</tr>
<tr>
<td>2（研）</td>
<td>29（男21、女8）</td>
<td>30</td>
<td>模擬対話</td>
<td>○</td>
</tr>
<tr>
<td>3（R）</td>
<td>52（男26、女26）</td>
<td>48</td>
<td>模擬対話</td>
<td>○</td>
</tr>
<tr>
<td>4（職）</td>
<td>154（男62、女74、不明18）</td>
<td>49</td>
<td>自由対話</td>
<td>○</td>
</tr>
<tr>
<td>5（音）</td>
<td>42（男31、女11）</td>
<td>33</td>
<td>模擬対話・講演</td>
<td>○</td>
</tr>
<tr>
<td>6（イ）</td>
<td>56（男20、女36）</td>
<td>50</td>
<td>インタビュー</td>
<td>○</td>
</tr>
</tbody>
</table>

発話者数、対話数の合計d | 333（男169+女155+不明18） | 282 | — | — |

a: 略名とは、実例を示すときに用いる、出典コーパスの略名。
b: 発話者数、及び対話数とは、本研究で資料として使用した対話における発話者数、対話数という意味。
c: テキストから方言が見せてとれるもの、日本語を母語としない話者のものなどは資料の対象外とし、数には含めていない。
d: ここでは対話の形式として便宜的に三種類に分類している。「自由対話」とはいわゆる自然会話、「インタビュー」とは話者のうちの特定の人物がインタビューとして固定しているもの、「模擬対話」とは、話題が日を持って設定された上で行われる対話である。また「講演」は対話ではないが、便宜的にこの欄に記載した。

発話者数の合計は『ATR 対話データベース』の人数を除外した合計となっている。

ている場合に注目する。そして両者が共起してい
る場合について、言い淀みの語が

- 「で」よりも先に出現するか（「言い淀み＋（で）」）
- 「で」よりも後に出現するか（「（で）＋言い淀み」）

という観点を観察する。

上記の観察の前に、接続詞「で」について、その
出現位置を確認しておくと、文と文の間に
述べる句の形の後に出現するのが典型的な例である。

(1)2: あっ、はい。ハンカチは800円です、時給。
1: 800円？（2は「はい」あーそうですか、で、パンなんかも
もらえるんか？（イ）

(2)E: そうゆうお店って自分で買いにいって一、で、その場で金
払って、もってもって、（ああ 他者（男））席について。（職）

一方、言い淀みの語は、「で」と同様に文と文の間、
述べる文の形の後に出現可能である他、例えば次の
ような場合に出現が可能である。

(3) パッケージの中で（あの）ジャージーが割れが（あの）
ありですので、（あの）つまり割れるのは（あの）

(4) 今度125号と、交差するところがあるんですが、（は
い）それなど（えーと）右折して（研）

(5) 日本人の学生の場合は、もう少しやっと引いてるって
いう（イ）

(6) あっあの一と茶茶壺を（1:ええ、ええ、ええ）作りまし
た、あの簡単な、うーんお話しをとか。（イ）

3以下、このことを「共起している」と表現する。
4同一発話者による発話内の場合に限定する。以下の言い
淀みの語の場合に同様である。
5倉1983は「で」も言い淀みのひとつとして挙げているが、
上のように言い淀みの語と比べて、「で」はその出現位置がよ
り固定的であることから、今回取り上げる言い淀みの語と同じ
には扱わない。

では以下から、言い淀みの語と接続詞「で」が
共起している場合の例を観察していく。

3.1 「（で）＋言い淀み」の形をとるもの

まず、「ええと」「あの1」「その1」「まあと」「やっと
ばり」「なんか」から見ると、これらは「で」と共
起した場合、「（で）＋言い淀み」という形を取るこ
とがわかる。「言い淀み＋（で）」となることは非常
に少ない。このように、これらは、接続詞「で」の
後に出現する言い淀みの語であり、「で」に先立っ
て出現することはきわめて困難である。

表2: 言い淀みの語と接続詞「で」との共起

<table>
<thead>
<tr>
<th>言い淀み＋（で）</th>
<th>用例数</th>
<th>（で）＋言い淀み</th>
<th>用例数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ええと（で）</td>
<td>0</td>
<td>（で）ええと</td>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>あの1（で）</td>
<td>8</td>
<td>（で）あの1</td>
<td>194</td>
</tr>
<tr>
<td>その1（で）</td>
<td>0</td>
<td>（で）その1</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>まあと（で）</td>
<td>1</td>
<td>（で）まあと</td>
<td>70</td>
</tr>
<tr>
<td>やっとばり（で）</td>
<td>0</td>
<td>（で）やっとばり</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>なんか（で）</td>
<td>1</td>
<td>（で）なんか</td>
<td>10</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(7) B: ［えー］8334の、（はい）934です。
A: はい。

B: で、【えーと】サイズコードは、【えー】62で、（はい）
お願いします。（研）

(8) それから今度はあの、ロンドンの方に、（はい）また、
あの、転居ということで、でー、あのわたくし、
あの、あの1（1:あーええ、好奇心旺盛なものですから
ら、（はい）はいはい行って行って（以下略）（イ）

(9) D: でそれがー、あの、あー済んでから、その討論に入ると。

—252—
このように「えー」「うーん」は、接続詞「で」に先立って出現することもあり、また、「で」の後に出現することもあり、どちらも可能な言い淀みの語である。

4 言い淀みの語の出現位置の範囲の記述

さて、言い淀みの語を接続詞「で」と共起した場合に注目して観察した結果、少なくとも今回取り上げた言い淀みの語には、

1. 「言い淀み＋(で)」、「(で)＋言い淀み」のどちらの形をとるのも ⇒ えー・うーん
2. 「(で)＋言い淀み」の形だけをとるもの ⇒ ええと、あのー、そのー、ああ、やっぱり・なんかがあることがわたった。つまりこれは、発話中における出現可能な位置の範囲が、1の類の言い淀みの語と2の類のそれとは異なるということである。以下では、これらの言う淀みの語の出現位置の範囲の違いを主に感動詞の出現位置と関連させて記述していく。

まず最初に、感動詞と、先ほどの観察で取り上げた接続詞「で」が共起した場合について、両者の出現位置の関係がどのようにになるのかを確認したい。両者が共起する場合は、「感動詞＋(で)」という形をとり、感動詞が先立てて出現する。「で」が感動詞よりも先に出することはない。

(18): うーん、あのー、アパートですか？
2: 今ですか？(1:はい)はそうです。
1: ああ、でー、どんなアパート？(イ)
(19): ええ、どこでやってましたか。
2: ええーと、ディフェンシャルパーク記念館の１つ、あるー、あるー、オーディトリウムで。
1: ああー、そうですかー。へえー、で音楽は誰が付けてくるんですか？(イ)

また、参考として「で」と他の接続詞が共起した場合のそれについても話しをしておくと、両者が共起している場合は、必ず「(で)＋他の接続詞」という共起順で出現している。

(20): そのメッセージ性がすごくあったんですね。1(うーん)で、それ、ちょっと飲んでみようかな、と思っている。1(イ)
(21): あーそうですか、私もなかなかキャッシュレスじゃないんでも大分ないんですけど、そうですね。で、じゃあ日本で１、三ヶ月お帰りになったときにどうに。1(イ)

「で」に限らず、接続詞が感動詞を導くことが不可能であることは、佐伯1970において述べられている。

(22): 「で」を共起していた接続詞は、それで、だから、それから、そうすると、じゃあ、だけど、でも、ただし等である。
以上、感動詞と接続詞「で」と、及び参考として「で」と他の接続詞について、それぞれ共起した場合の出現位置の関係を見た。接続詞「で」を中心に括れて、感動詞、他の接続詞の出現位置を整理し、それによる記述の出現在範囲を加えると、次のようになる。

感動詞 + (で) + (彼の接続詞) 
えー・うーん + (で) + (えー・うーん) 
えーと・あの等

1の類の言い淀みの語「えー」「うーん」は、感動詞の出現位置に出現することができると同時に、感動詞が出現することが不可能な「で」の後にも出現することができる。2の類の言い淀みの語「えー」「あの一人」「あま」等は、感動詞が出現することが不可能な「で」の後に出現する。

<table>
<thead>
<tr>
<th>語</th>
<th>『で』よりも先に出現</th>
<th>『で』よりも後に出現</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>基の語</td>
<td>×</td>
<td>○</td>
</tr>
<tr>
<td>拡張語</td>
<td>○</td>
<td>○</td>
</tr>
<tr>
<td>えーと・あの一人等</td>
<td>×</td>
<td>○</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表3：接続詞「で」と共起した場合の出現位置の範囲一覧

5 今後の展望

本研究では、言い淀みの語について、接続詞「で」と共起した場合に注目することで、その出現位置の範囲を、きわめて部分的にではあるが記述した。

言い淀みの語と「で」以外の他の接続詞との共起関係については、現時点では調査中であるが、さらに言い淀みの語によって、共起順に差がありそうである。

以上のように、出現位置の範囲によって言い淀みの語を分類することが可能であることから、今後は、談話中の言い淀みの語の機能についても、このような分類ごとに詳しく考察を進めていくことが可能であると思われる。

参考文献


[18] 島原弘 (1988): 「外国人とのための日本語会話ストラテジーとその教育」、「日本語学」、7巻3号、明治書院
[21] ボリ・ザラウスキ (1987): 「談話の分析と教授法」、「言語学センターの中心」、「日本語学」、6巻1号、明治書院

[26] 千葉晃 (1997): 「日本語スピーカーの会話における「情報伝達行動の持続」、「世界の日本語教育」、7号、国際交流基金 日本国際センター

—254—